

オノマトペに対する意識の地域比較

A dialectal comparison of the image and use of onomatopoeia

平田佐智子^{*1} 秋田喜美^{*2} 小松孝徳^{*3} 中村聡史^{*4} 藤井弘樹^{*5} 澤井大樹^{*5}
 Sachiko Hirata Kimi Akita Takanori Komatsu Satoshi Nakamura Hiroki Fujii Daiki Sawai

^{*1} 日本学術振興会(東京大学) ^{*2} 大阪大学 ^{*3} 信州大学 ^{*4} 京都大学 ^{*5} 株式会社アイデアラボ
 Japanese Society for Promotion of Science Osaka University Shinshu University Kyoto University IdeaLab Inc.

Onomatopoeia is believed to be particularly frequent in some dialects of Japanese. In this study, we conducted an Internet-based survey to examine whether there is really a difference in the use of onomatopoeia among the eleven major areas of Japan. The results suggested that people's subjective impression of their own frequency of use of onomatopoeia does not differ from dialect to dialect. It turned out, however, that they do conceive of some dialects, especially the Kinki dialect, as notably furnished with onomatopoeia.

1. はじめに

オノマトペ(擬音語・擬態語)は日本語語彙の一部を占め、漫画や商品の宣伝などに幅広く使用される。その一方で、話し言葉におけるオノマトペ使用頻度は地域や状況によって異なり、特に近畿圏の使用頻度が高いという指摘がなされている。そこで、本研究では一般的に信じられている「近畿の人はオノマトペ使用頻度が高い」という信念が実際に存在するのか、またその信念が生じる起因を探ることを目的とする。

2. 序論

2.1 オノマトペ

オノマトペとは、「ドンドン」「ふわふわ」など、物や人の状況や心情を音を用いて表現する言葉であり、擬音語・擬態語・擬情語とも呼ばれる。オノマトペは商品の素材や質感、また動作の詳細を効果的に伝えるツールとして注目されている。

2.2 オノマトペと地域

同じ日本語と呼ばれる言語であっても、地域によって方言と呼ばれる様々な日本語が存在するように、オノマトペもある地域において使用頻度が高い、という認識が存在する。

このような認識のうち、最も強いものは「関西に住む人はオノマトペを多用する」であると考えられる。例えば、関西のテレビ番組の内容を分析した上で、「ガーッ」「バーッ」などのオノマトペが多用されることが指摘されている[田原 01]。また、関西の人々の性質について描かれた本でも、オノマトペを使用することが関西の人々の特徴であることが述べられている[わかぎ 11]。

また、方言談話に関する全国調査の結果によると、必ずしも一定発話数中に含まれるオノマトペの数は関西圏が多いわけではなく、どちらかというと東日本で多い傾向が認められる、とされている[三井 07]。また、方言オノマトペ(地方特有のオノマトペ)の種類に関しては、東北地方において多いという報告もなされている[三井 07]。

しかし、実際に関西地方に住む人が他の地方よりもオノマトペを多用する傾向があるのかどうかを扱った研究は現時点で見当たらない。よって、実際にオノマトペを当該地域で多用しているわけではなく、人々がそのようなイメージを持っているだけであ

る可能性も考えられる。このような、オノマトペ使用頻度が国内の各地域によって異なるのか、という問題を明らかにするには、日常の会話においてオノマトペをどの程度使うか、とどの地方の人がオノマトペを多く使うかを調べる必要がある。さらに、実際の使用頻度と、主観的なイメージが食い違うのであれば、そのイメージがどこから来るのかを突き止める必要がある。

本研究では、

- 1) 国内の各地域において、オノマトペ使用頻度に差があるのか
- 2) 最もオノマトペを使う地域として認識されている地域はどこか
- 3) これらが食い違うのか、食い違うのであれば「オノマトペをよく使う地域」のイメージは何によってもたらされるのか

の3つの問いを明らかにすることを試みる。これを「オノマトペ使用頻度の地域差」とし、本稿ではこの問題が実際に存在するのか、また存在するならば、何が原因なのか、を明らかにすることを目的とする。

3. 方法

3.1 調査対象者

日本国内に住む 1100 名の日本人を対象とした。47 都道府県を 11 のエリア(北海道・東北・関東・信越・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄)に分割し、各エリアに対し 100 名(男女比 1:1、年代は 16~65 歳を 5 カテゴリに分割し、各カテゴリに 10 名)分の回答数が得られるように操作した。また、海外滞在歴が 2 年未満である人を調査対象とした。

3.2 調査項目

本調査では、以下の 4 つの設問に対し、調査対象者に回答を求めた。

1)「あなたは日常の会話において擬音語・擬態語(「ふわふわ」「くるくる」などのことば。オノマトペとも呼ばれます)をどの程度使いますか。(以下 Q1 とする)」

回答方法: 五件法(1: 一日(会話をした日)に20回以上、2: 一日(会話をした日)に10回以上~20回未満、3: 一日(会話をした日)に10回未満、4: 数日に一回、5: 滅多に使わない)

2)「これをよく使う」というお気に入りの擬音語・擬態語があれば具体的に教えて下さい。(以下 Q2 とする)」

回答方法: 自由記述、上限 15 件

3)「日常生活で擬音語・擬態語を多く使っているイメージがあるのは、どこの地方の人ですか。(以下 Q3 とする)」

回答方法: 1 位~5 位まででエリア名を回答

連絡先: 平田佐智子 東京大学大学院教育学研究科
 〒113-0033 東京都文京区本郷 7 丁目 3-1
 e-mail: marshmallow1214@gmail.com

4)「前の質問で選んだ「最も擬音語・擬態語を多く使用している地方の人」のイメージに一番近いのは誰ですか。(以下 Q4 とする)」

回答方法: 与えられた 6 つの人物カテゴリの選択後、自由記述

3.3 手続き

調査は Web 上で行われた。調査実施期間は 2012 年 1 月 31 日～2 月 2 日の間であった。

4. 結果

4.1 スクリーニング

調査項目 Q2 の回答を元に、以下の条件に該当するとみられる対象者を除外した。除外理由としては、オノマトペの定義を誤解している可能性が考えられたためである。

- 語尾であると認識している(「だよ」「なり」)
- 繰り返しの言葉全般であると認識している(「行く、行く」「まあまあ」「たまたま」)
- 若者言葉全般であると認識している(「マジ」「ヤバくね」)
- 間投詞・感動詞であると認識している(「えー」「あっ」)
- その他(「一応」「ちなみに」「普通」「ちゃんと」)

スクリーニングの結果、39 名が除外対象とされた。以降の分析ではこれらの対象者のデータは分析対象としなかった。

4.2 各地域におけるオノマトペの使用頻度

(1) 各地域におけるオノマトペの主観的使用頻度

まず、1)国内の各エリアにおいて、オノマトペの使用頻度に差があるのか、という点を明らかにするため、Q1 において「日常会話においてどの程度オノマトペを使用するか」、すなわちオノマトペの主観的使用頻度について回答を求めた。図 1 は各エリアにおける主観的使用頻度を示す(1 は滅多に使わない、5 は会話をした日に 20 回以上使う、を示す)。

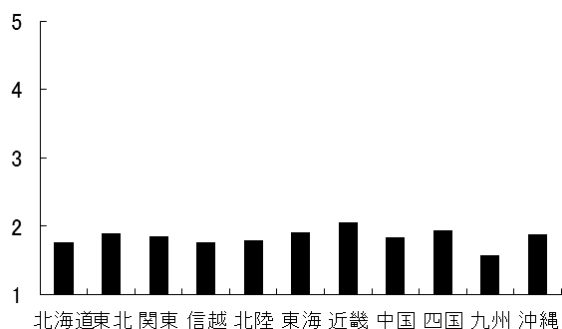


図 1 各エリアにおける主観的オノマトペ使用頻度

各エリアのオノマトペ主観頻度は全体的に低く、最も高いのは近畿であることがわかる。各エリアの頻度に対し、クラスカル・ウォリスの検定を行った結果、有意な差は見られなかった($\chi^2 = 6.4865$, $df = 10$, $p = .77$)。この結果から、各エリアにおける主観的オノマトペの使用頻度には差が見られないということがわかった。

(2) 高頻度オノマトペ利用地域の認識

次いで、2) 最もオノマトペを使う地域として認識されている地域はどこか、を明らかにするため、Q3「日常生活で擬音語・擬態語を多く使っているイメージがあるのは、どこの地方の人です

か。」に対して、各エリアから 1 位から 5 位までを選出させた。図 2 は最もオノマトペを多く使用していると回答されたエリアを示す。

図 2 から、4 割近い調査対象者が、「近畿」を「最もオノマトペを使用するエリア」と回答していることがわかる。また、東北、沖縄、関東がその他の地域よりも割合を占めていることがわかる。

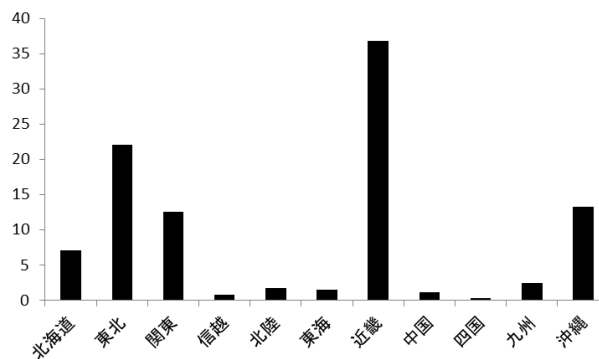


図 2 オノマトペの使用頻度が最も高いとされるエリア (縦軸はパーセンテージを表す)

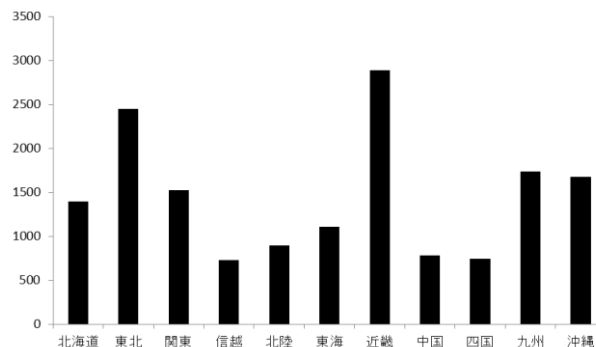


図 3 オノマトペの使用頻度が高いとされるエリア (縦軸は重み付けされた合成得点を表す)

1 位から 5 位に選択されたエリアに対し、1 位には 5 点、2 位には 4 点、3 位には 3 点、4 位に 2 点、5 位に 1 点を付与し合算することで、重み付けを行った上で合成得点を算出し、比較した。図 3 は重み付けを行った各エリアの得点を示す。

図 3 より、近畿が最もオノマトペを使用している、という傾向は変わらないが、東北との差が小さくなっていることがわかる。さらに北海道や九州も 2 位～5 位として挙げられていることが見受けられる。

(3) 結果のまとめ

Q1 では各エリアの調査対象者に対し、日常会話においてどの程度オノマトペを使用するかを尋ねた。その結果、オノマトペの使用頻度は全体的に低めであり、またエリアによる差も見られないことがわかった。

Q3 では、最もオノマトペを使うと認識されている地域を尋ねた結果、4 割近い調査対象者が「近畿」を選択し、さらに 1 位～5 位の結果を総合した場合でも近畿が得点が最も高いということがわかった。

Q1 は実際のオノマトペ使用頻度について、また Q3 は調査対象者が認識しているオノマトペ使用頻度を表している。Q1 と Q3 の結果が一致しているのであれば、調査対象者は実際のオノマトペ使用頻度を正しく認識していることになる。しかし、本研

究において得られた結果は明らかなバイアスが観察された。このバイアスは何によってもたらされたのだろうか。

4.3 オノマトペ使用頻度認識のバイアス

調査を行った結果、各エリアにおける実際のオノマトペ使用頻度と、オノマトペを多く使用する地域の認識が異なっていた。すなわち、実際は各エリアの使用頻度には差がないにもかかわらず、ある特定の地域において使用頻度が高いという認識が存在するといえる。この認識のバイアスは何によってもたらされたのかを明らかにするため、Q3 において選択したエリアのイメージを形成している人物について回答を求めた。

(1) オノマトペ使用エリアのイメージを形成する人物カテゴリ

Q4 として「前の質問で選んだ「最も擬音語・擬態語を多く使用している地方の人」のイメージに一番近いのは誰ですか。」という設問を設け、選択肢として「芸能人(俳優・女優)」「芸能人(芸人)」「親戚」「仕事関係の知り合い」「友達」「それ以外」の 6

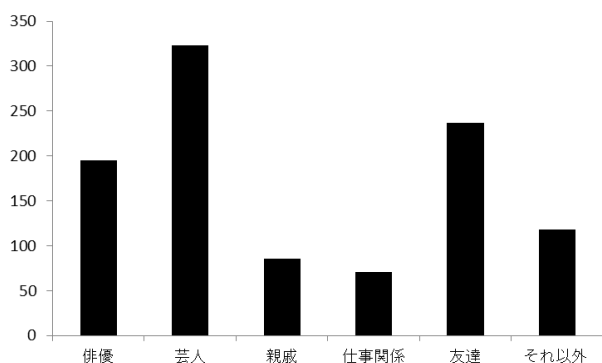


図 4 オノマトペの使用頻度の高いイメージを形成する人物

カテゴリを設けた。カテゴリを選択した後、「芸能人(俳優・女優)」「芸能人(芸人)」「それ以外」を選んだ対象者に対しては具体的な人物、「親戚」「仕事関係の知り合い」「友達」を選んだ対象者に対してはわかる範囲で該当人物の出身地を自由記述させた。

図 4 より、「芸能人(芸人)」が最も多く、次いで「友達」「芸能人(俳優・女優)」が挙げられていることがわかる。これらのことからオノマトペの使用頻度が高いイメージを形成しているのは芸能人など、マスメディアを介して接する人物であることがうかがえる。俳優・女優・芸人を「マスメディア関係」、親戚・仕事関係・友達を「実人間関係」というカテゴリにまとめると、マスメディア関係が全体の 48.4% を占め、対する実人間関係は 37.1% を占めていた。また、「その他」の自由記述にもテレビやインタビューによる影響を指摘している記述が 16 件あり、マスメディアによって与えられたイメージが、オノマトペ使用頻度認識のバイアスに関与している可能性が考えられる。

なお、各カテゴリにおける自由記述において多く挙げられた人物および出身地を一部抜粋して以下に挙げる。括弧内は出身地を表す。なお、俳優・女優・芸人は明確に区別するのが難しく、両カテゴリに同一人物が挙げられている場合が散見したため両カテゴリをまとめ、「芸能人」として扱う。

・芸能人(俳優・女優・芸人):

- 1) 明石家さんま (77 件 奈良県)
- 2) あき竹城 (34 件 山形県)
- 3) 具志堅用高 (28 件 沖縄県)
- 4) 久本雅美 (22 件 大阪府)
- 5) 吉幾三 (17 件 青森県)

・親戚:

- 1) 大阪府 15 件
- 2) 青森県 7 件
- 3) 北海道 7 件

・仕事関係:

- 1) 大阪府 10 件
- 2) 埼玉・鹿児島・東京 3 件

・友達:

- 1) 大阪 44 件
- 2) 沖縄 15 件
- 3) 青森 9 件

特徴としては、芸能人において最も多く挙げられた人物は関西出身ではあるが、山形・沖縄など近畿圏以外も含まれること、また実人間関係においては大阪府出身者が目立つことが挙げられる。これらの人物がオノマトペ高頻度使用者のイメージを形成していると推測される。

5. 考察

本研究では、3つの問題に対して回答を試みた。まず、

1. 国内の各地域において、オノマトペ使用頻度に差があるのか

という問題に対しては、調査を行った結果、顕著な差は見られないことがわかった。ただし、後述する問題点について引き続き検討する必要があると言える。また、

2. 最もオノマトペを使う地域として認識されている地域はどこか

という問題に対しては、1位として選択されたエリアは近畿であり、2位から5位を総合しても近畿が最も多く、その次に東北・九州・沖縄が選択されることがわかった。この結果から、通説として定着している「関西の住む人はオノマトペを使用する」というイメージは実際に存在することが示された。さらに、

3. これらが食い違うのか、食い違うのであれば「オノマトペをよく使う地域」のイメージは何によってもたらされるのか

という問題に対しては、「オノマトペをよく使う人」を挙げてもらうことによりオノマトペ高頻度使用者のイメージがどのように形成されているのかを検討した。その結果、半数近くの調査対象者が芸能人を挙げたことから、マスメディアからの影響が大きいことがうかがえる。また、親戚や仕事関係の人物など、実人間関係においても大阪府(近畿)出身者を挙げる回答者が多かったことから、マスメディアのみでなく、身近な人物からも「関西の住人はオノマトペをよく使う」というイメージが形成されていることが推察される。

5.1 主観的オノマトペ使用頻度

本研究では、オノマトペの使用頻度を求めるにあたり、調査対象者の主観的な頻度を尋ね、得られた結果を主観的使用頻度として扱った。しかし、このデータはあくまで調査対象者が認識している頻度であり、実際の発話中にどの程度オノマトペが含まれるのか、に関しては話し言葉コーパスや実際の発話データをあわせて使用するなど、別の方法で明らかにする必要がある。

ただし、Q1 では個々人がどの程度の割合でオノマトペを使用するか、ではなく「〇回」という絶対値による回答を求めているため、調査対象者の認識と実際の発話状況に差が少ないようであれば、ある程度信頼できるデータであると言える。

また、今回の調査ではオノマトペの使用頻度を 5 段階に分けたが、主観的オノマトペ使用頻度にほとんど差が見られなかったため、この段階の区分が不適切であった可能性が考えられる。

そのため、各エリア間に存在した可能性のある使用頻度の差を適切に捉えることができなかったのかもしれない。回答項目の区分を改めて、再度調査する必要が求められる。

5.2 オノマトペ地域比較の今後

本研究の結果として、問題点が残るものの、実際のオノマトペ使用頻度と、各エリアの住人に対してもつオノマトペ使用頻度イメージに食い違いが生じていることがわかった。さらにそれを引き起こしているのは、親戚や友達など身の回りの人物の影響もあるが、芸能人を中心としたマスメディアの影響が強いことが明らかになった。これらの結果は、今まで実証的な検討がされてこなかった「関西の住人はオノマトペをよく使う」という通説が、事実としては存在せず、マスメディアによって形成されたイメージである可能性を示唆する。

本研究では扱わなかったが、オノマトペの地域比較を行う上で最も重要な問題として、方言オノマトペ(各地域に存在する固有のオノマトペ)の存在が挙げられる。オノマトペにも、全国的に使用されるオノマトペと、地域固有のオノマトペが存在するため、各地域によって「何がオノマトペであるか」の基準が異なるのである。これは、地域を単独で見ると問題が生じないが、全国的に比較を行う場合、個々の地域の特性を考慮する必要が出てくるのである。今後地域比較を行う上で避けては通れない問題であり、方言学者との連携が必要になると考える。

参考文献

- [三井 07] 三井 はるみ, 井上 文子: 方言データベースの利用, 小林 隆(編), 方言学の技法, pp. 39-89, 岩波書店, (2007)
- [田原 01] 田原 広司: ピヤッととちぎってシャッと渡す—関西弁のオノマトペ—. 月刊言語, Vol. 30, pp. 24-25 (2001)
- [わかぎ 11] わかぎ ゑふ: 「はい」といわない大阪人. ベストセラーズ (2011)

謝辞

本研究は、科学研究費補助金: 特別研究員奨励費(課題番号: 23・4301)(平田)、科学研究費補助金: 学術研究助成基金助成金(若手研究(B))(課題番号: 24720179)(秋田)、科学研究費補助金: 学術研究助成基金助成金(若手研究(B))(課題番号: 23700248)(小松)、科学研究費補助金: 学術研究助成基金助成金(若手研究(A))(課題番号: 23680006)(中村)の補助を受けて行われた。